

113. 重要文化財 膳所神社表門の 解体修理

はじめに

旧膳所城遺構である重要文化財膳所神社表門（大津市膳所1丁目）は近年瓦のずれ落ち、軸部の腐朽折損等が著しく進み、これ以上放置できない状態となったため、昭和57年5月より翌年2月までの10か月の工期で県教育委員会文化財保護課によって解体修理工事が行なわれた。本稿はその工期中の諸発見及び考察の報告である。

膳所城について

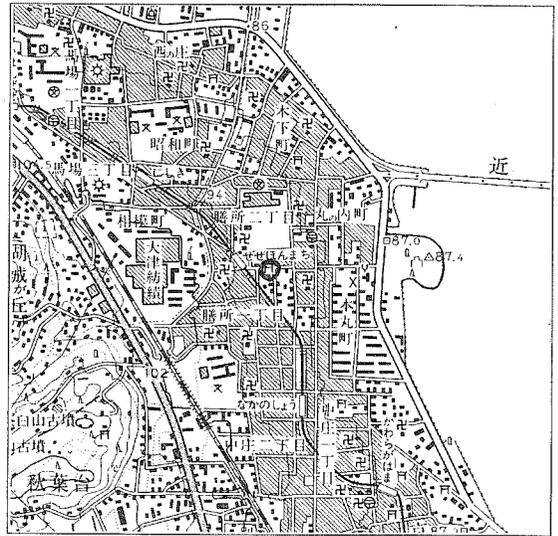
膳所城は徳川家康が慶長5年の関ヶ原の戦いで勝利を得た後、大阪方への包圍網として天下に命じて築造したいわゆる天下普譜の最初と言われ、慶長6年(1601)藤堂高虎の繩張による琵琶湖上に半島状に突き出た水城である(家忠日記)。建物は膳所城築城と同時に廢城になった大津城の物を移したと今日まで、広く信じられているが、後述の通り、今回の解体修理中それらを実証する古材が発見された。

膳所城の初代の城主は、当時一躍家康の信任が厚くなった大津城主戸田左門一西が3万石で入城したが、江戸時代前半の他藩と同じ様に多数の大名が入れ代わる。本多氏、菅沼氏、石川氏と移り、慶安4年再び本多俊次が伊勢龜山城より移封されてからは本多家が代々世襲する様になった。膳所藩の封地は主に栗太郡・滋賀郡で7万石を領したが延宝7年(1679)康慶襲封の際、弟の忠恒に1万を分封したため、以後6万石となった。

膳所城の規模は平田好著の膳所藩懐旧坐談によれば本丸、二ノ丸などの内郭が9,606坪、外郭18,900坪、その他総計28,623坪であったという。

膳所神社について

同社の濫觴は天智朝の大津京遷都の際、今日の膳所一帯が御厨所に定められ天武朝時代に大和国より御食津神を勧請し祭ったと伝えられているが、それらを証するものは何もない。同社の実像が知られるのは膳所城築城の時からで、当時相模川々洲にあった小祠（大梵天王と呼ばれていた）が同社の前身で、築城にあつた



膳所神社位置図

1 : 25000

り現在の位置に移されたのである。以来、歴代の城主の信仰厚く社殿の造営、修理が行なわれたことが古記録で知られる。

現在は表門の他2棟の城門が移築されていて、周囲の城下町の風情を残す町並みと共に貴重な存在になっている。

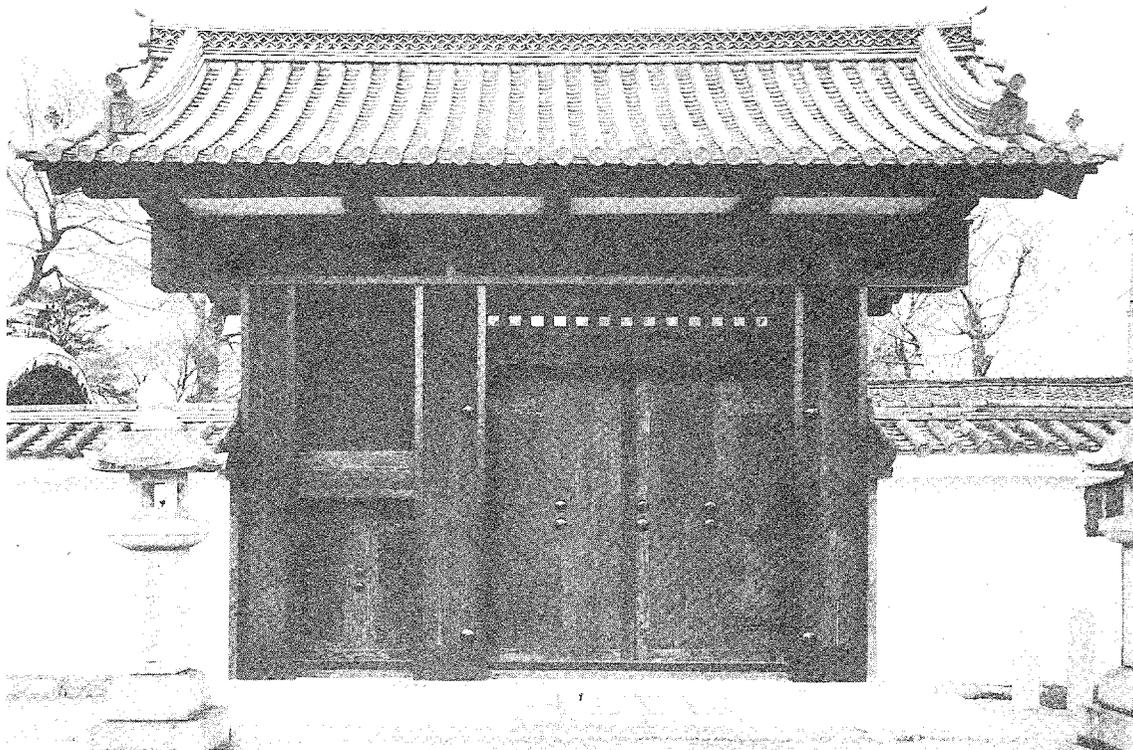
表門の構造形式

表門の形式は城門としては高麗門と共に一般的な薬医門(脇戸付)で、屋根は本瓦葺とし、現在は東面して建っている。以下、各部の構造形式を説明すると、**基礎** 膳所城からの移築のため花崗岩切石の柱礎石、延石以外当初の様子は不明である。現在は敷石、葛石の他はタタキとしている。

軸部 本柱3本、控柱2本、そして冠木、敷桁、梁、軒桁等よりなるが、このうち本柱と冠木は約1分厚の櫓板を古材を集めた真材に吸い付け棧で引き付けるといふ構法を用いている。この構法は膳所城遺構では普通に見られるものであるが全国的にはめずらしい工法である。その他の部材は主に柵材が使用されている。

軒廻り 垂木は一軒疎垂木で反り増し付。茅負は眉決りはつけない。裏甲は軒が布裏甲とし妻は切裏甲である。現在の北の破風板は当初のものである。

妻飾り 小規模な妻のため、実肘木、大斗を組んだ妻束で化粧棟木を受ける。壁は添喰壁とする。



正面 全景

屋根 大棟の修理前は藁積であったが、他の遺構を参考に輪違積に整備した。鬼瓦は明治21年の銘のあるものが使用されていたが、降り棟に当初と思われる鬼瓦が残っており、それにならい作成した。軒丸瓦及び軒平瓦は当初と思われるものが少数残っていた。また瓦の寸法などから、他の建物のものと思われるものがあった。残りの多数は後世の補足の瓦である。鬼瓦、隅蓋瓦、軒丸瓦は本多氏の立葵紋を飾る。

柱間装置 大扉・小扉(共に総檜材)を肘金物で吊る。扉は縦嵌板張りで、他のどの遺構よりも強固な構造になっている。

金具 扉に八双金具や唄金具を取り付け、柱及び冠木の隅部分はすべて隅金物を鋸打ちとする。材種は全て鉄である。

壁 脇戸上は横嵌板。妻壁、天井は添喰土とするが、現存する膳所城遺構では唯一である。

明治3年の移築

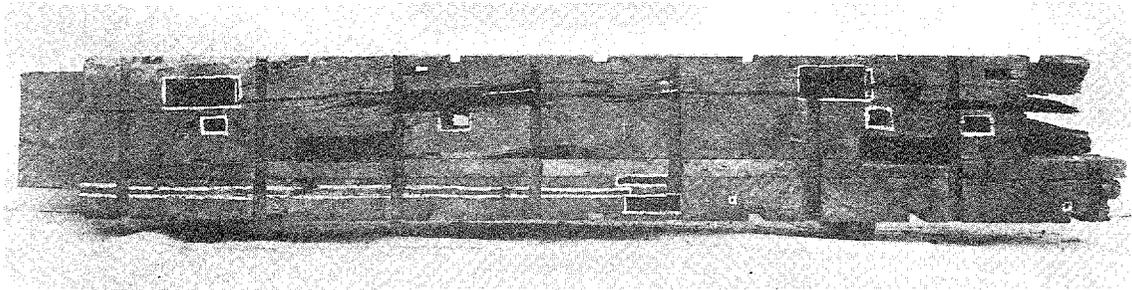
表門の膳所城からの移築は、明治期という以外のごとは不明であったが今回の解体調査中、明治3年8月に移築が完了したことを示す棟札が棟木下端に打ち付けられているのが発見され、明治3年4月の膳所城築却直後に移されていたことが判明した(同じく重文で北大手門を移した篠津神社は明治5年である。南大手門を移した鞭崎神社表門は棟札はあるが年代は不明で

ある)。

明暦元年(1655)の建立

一方、表門の膳所城における建造については修理前までは全く資料を欠いていたため、一応膳所城築城当初である慶長年間頃と考えられていたが、冠木の解体調査中に側板を真材に引きつける吸付け棧に「**明暦元年十二月廿五日**」の銘のあるものが発見され、続いて柱解体中には「**承応四年十一月吉日本多下総守様御此御大工**」の銘のある吸い付け棧が発見された(明暦元年と承応四年は同年である)。さらに冠木の真材の現在使用されていない古い仕口穴より「**明暦元年十一月廿五日……**」の銘のある銘札が発見された。以上の諸発見及びそれらの部材が後世解体を受けてないことより、表門が明暦元年(1655)に建造されたことが判明した。これによってこの門の建築様式が桃山時代のものではなく江戸時代中期の城門のものということになったわけで、城郭建築史上貴重な発見ということにとどまらず、同じ膳所城から移築した門で重要文化財に指定されていないながら年代が不明な篠津神社表門や鞭崎神社表門の建造年代についても一石を投じた形となった。

なお、冠木真材から発見された銘札は大変重要な内容を含んでおり棟札と変わらない貴重なものである。すなわち(1)江戸時代中頃になると作事(建築工事)と普請(木工工事)の区別はしだいになくなってくる時期で



白線が古い仕口穴である柱真材（貼板を取りはずした状況）

あるが、明確に表門の建造を作事と呼んでいる。(2)御大工宮木茂助一御大工(おだいく)とは室町時代から見られる社寺の大工職と異なり幕府に仕える官職的性格をもっていた大工と言われ、桃山時代や江戸時代においても、同様に武将や諸藩に仕えた官僚的性格の強い大工であった。宮木茂助はそうした膳所城建築工事全体の総責任者であったのではないだろうか。(3)大工のかず八人。銘札の裏面には左と市郎左衛門と大工のかず八人なりと書かれていて、表門に八人の大工が出仕したことが知られる。また左と市郎左衛門は実際の施工の責任者であったのであろうか。この種の城門で大工の数を書いてあるもので兵庫県の姫路城りの門（表門と同程度の高麗門）の「慶長四ねん大工五人」が著名であり、同時に城門の大工工数を知る上でも貴重な資料となるであろう。

発見古材について

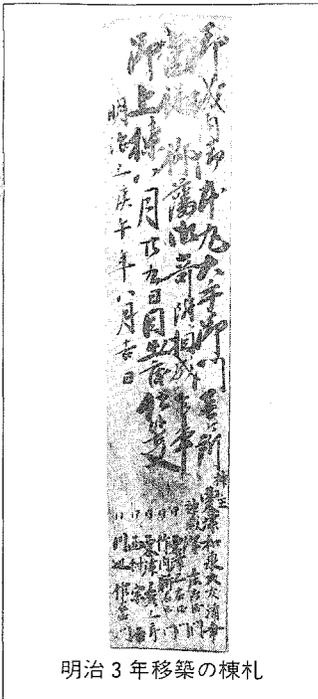
前述の通り柱及び冠木の真材には城郭建築の古材が

再使用されていた。この貼板工法は真材が見え隠れになるため、移築・転用が何度か行なわれる城郭建築には最適な工法ということができるかも知れない。

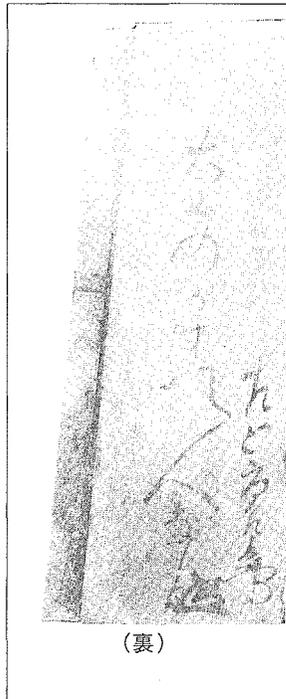
表門の真材の8割以上は古材であり、大半は旧仕口穴等が認められるという程度のものであったが、2～3の部材は城門特有の大形の肘金物穴や貫仕口等が認められる他ある程度の復原寸法まで知ることのできるものもあった。またそれらの内、以前の使用が一度だけではなく、明らかに2度転用が認められるものもあり膳所城の歴史を考える上で貴重な資料になると思われる。すなわち建築としての耐用年限を考えれば慶長6年から明暦元年までの54年間に、2度の転用は無理があり膳所城の前身とも言うべき大津城の遺材である可能性が非常に強いと考えられるのである。

樹形の門

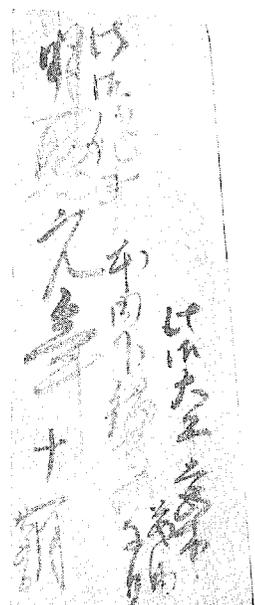
一般に城郭の入口は樹形あるいは見付けと呼ばれる平面方形又は矩形で四周に石畳をめぐらした部分で、



明治3年移築の棟札



(裏)



(表)

明暦元年建立の銘札

正面には第一の門として冠木門（衡門—コウモンとも言う）を置き、直進又は左・右折して第2の門の櫓門等に至る一部で城郭の繩張の重要な点であった。表門は冠木榼羽部分下端及び両端本柱側面に板溝や楣等の旧仕口が残っており、明暦元年当初は榼形の門として建築されたことが推察される。また控柱真と本柱真のずれは右の6寸に対し左は約2倍の1尺1寸5分と大きく開き、他方脇戸が左に付く点からも考えて、表門は榼形の門でも正面より入って左へ折れる榼形の門であった可能性が強いと思われる。榼形の冠木門の控柱で折れ曲がる方が大きく開く例は他には丸亀城大手一の門（重要文化財・香川県）がある。

表門の旧城内位置

表門は地元の伝承によれば「二ノ丸から本丸への城門」と伝えられているが、これに該当する門は数棟あり、具体的にどの門かはわからない。また今回発見の明治3年の棟札にも「…御本丸大手門壹ヶ所…」とあるだけでやはり不明である。そこで、表門の建築的特徴を整理すると次のようになる。

- (1)表門は明暦元年に左折する榼形の冠木門であった。
- (2)番付より当初は南面して建てられた。
- (3)天井・妻壁を漆喰塗りとするなど小規模ながら上等な仕上げになっている。

以上の諸点を寛文2年の膳所城絵図（県庁蔵）に照らして考えると明暦当初には帯曲輪に建てられ、寛文2年近江国を襲った大地震によって城全体が大きな被害を受け帯曲輪が廃止されたことにより新しく出来た二ノ丸の正面に移された門の可能性が最も強いと思われる。二ノ丸は本丸と廊下橋で結ばれており伝承にも合致する。

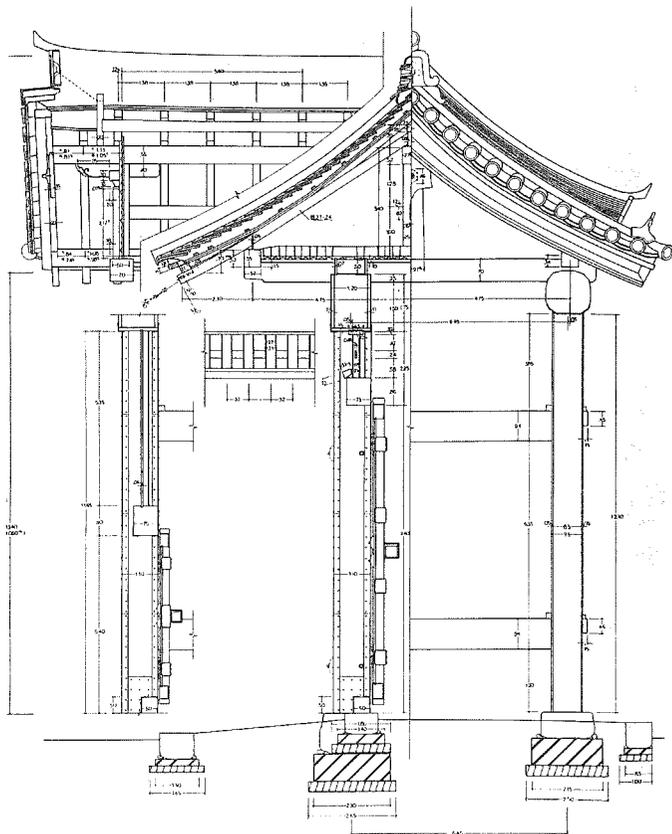
おわりに

以上、重要文化財膳所神社表門の解体修理結果の概要を述べたが、小建築でありながら内容豊かな明暦元年の銘札や大津城のものらしき古材が発見された。この修理によって、より文化財としての価値が高くなったものと思われる。

（大上直樹）

〔参考文献〕

- 重要文化財篠津神社表門解体修理工事報告（県教育委員会 昭和33年）
- 重要文化財膳所神社表門解体修理工事報告（県教育委員会 昭和58年）



断面詳細図

現存旧膳所城遺構一覧表

現所有者	所在地	旧城内位置	備考
個人所有 （細川家）	大阪府泉大津市	勢多口総門	高麗門 建部神社をへて現所有者へ
個人所有 （森本家）	大津市御殿浜	同上番所	入母屋造、民家として使用
◎鞭崎神社	草津市矢橋	南大手城門	高麗門
◎篠津神社	大津市中ノ庄	北大手城門	〃
○若宮八幡宮	大津市別保	本丸犬走城門 （伝承）	〃
◎膳所神社 （表門）	大津市膳所	二ノ丸より本丸への城門（伝承）	薬医門
〃（北門）	〃	不詳	〃
〃（南門）	〃	不詳	高麗門
御霊神社	大津市鳥居川	本丸黒門（伝承）	〃
新宮神社	草津市野路	二ノ丸北手水門 （伝承）	棟門
近津尾神社	大津市園分町	不詳	薬医門
芭蕉会館	大津市秋葉台	本丸東正面の二重櫓	
六体地藏堂	大津市相模	不詳	安政2年建造の櫓

◎印は重要文化財、○印は大津市指定文化財